



日本救急救命学会

JSELS

newsletter

Japanese Society for emergency life-saving

第11号

令和5年12月1日

一般社団法人日本救急救命学会 事務所 〒164-0001 東京都 中野区中野2-2-3 (株)へるす出版内
E-mail:info@jsels.jp URL:https://jsels.com

第9回日本救急救命学会学術集会 御礼

第9回日本救急救命学会学術集会は、多数の皆様にご参加いただき、盛会のうちに終了いたしました。ご発表及びご参加いただきました皆様、ご協賛・ご出展いただきました企業様に厚く御礼申し上げます。

今回の学術集会のメインテーマを『救急救命士の「臨床」「教育」「研究」を考える～変革の時代に備えるために～』としました。これから救急救命士が目指すべき方向性をお示しいただき、「今こそすべての救急救命士が集うべきだ」と激励を込めた教育講演に参加者の誰もがご納得されるご講演であったと推察いたします。

2つのパネルディスカッションでは救急救命士の教育や研究について計13演題のご発表を頂き、様々な機関で勤務する救急救命士の今後の在り方を示す、活発な議論がなされました。

一般演題においては、事務局で想定していた予定演題数を大幅に超える19演題のご登録を頂き、救急救命士の臨床について、法改正後の医療機関における救急救命士の現状や課題、新たな取り組みなどご発表いただきました。

今学術集会は、その運営や進行には全くの素人の一救急救命士が大会長を務めること、運営事務局も全員素人でございました。至らぬ点や不行届きの点など多々あったかと存じます。多くの皆様にご迷惑をお掛けしたこと、どうかご容赦をお願いいたします。

今回、地方会場では、初の単独開催となりました。会場のあちこちで同期やお仲間と数年ぶりの再会や旧交を温めている姿を拝見しまして、学術集会の本来の目的以外にこの学術集会が果たさなければならぬ重要な役割をも担っていることを改めて認識することができました。

第10回学術集会は、島根県出雲市で開催されます。全国の救急救命士が由緒ある神様のもとに集結することにより、救急救命士の「学問構築」とこれからの未来に向けて、しっかりと救急救命士がその職責を果たしていく決意をする、そのような大会を皆さんと作っていくことをお約束しまして、お礼の挨拶とさせていただきます。

大会長 中川 貴仁
弘前医療福祉大学短期大学部 救急救命学科 准教授

会員募集中

名称 **一般社団法人日本救急救命学会**

設立年月日 2014年5月30日

主な活動

- ・ 学術集会の開催
- ・ 会員向けワークショップの開催
- ・ 救急救命士及び病院前救急医療に関する調査・研究、教育と普及・啓発
- ・ 会員相互の情報交換及び機関誌の刊行
- ・ 国内外における関係諸団体との交流
 - ・ 日本臨床救急医学会メディカルコントロール検討委員会への委員の派遣
 - ・ JPTEC協議会への役員の派遣
 - ・ 民間救命士統括体制認定機構への理事の派遣など

会員区分

- ①正会員本法人の目的に賛同し、所定の入会手続きにより入会した救急救命士の資格を有する個人。
- ②賛助会員本法人の目的に賛同し、事業を賛助するために、所定の入会手続きにより入会した医師、看護師などの医療職種、または救急隊員資格を有する個人。

③名誉会員本法人の発展に特に功労のあった者で、理事会より推薦され、評議員会の承認を得た個人。

④協賛会員本法人の目的に賛同し、事業を支援するために、所定の入会手続きにより入会した個人又は団体。

会員登録

年会費9,000円

(協賛会員団体50,000円/口)

会員登録は専用フォームからお申込みください。ご登録頂いたご住所に振込用紙を送付致しますので、年会費をお振り込み下さい。

お振込が確認できた段階で会員登録致します。

会員登録作業は月2回のため、お待たせすることがございます。また、お振込確認後の会員登録が完了した旨の連絡は致しませんので、ご了承下さいますようお願い申し上げます。

日本救急救命学会
会員申し込み専用フォーム



第9回日本救急救命学会学術集会を振り返る

開催日時：令和5年10月28日（土）9時00分～17時40分
 会場：弘前医療福祉大学短期大学部（青森県弘前市小比内3丁目18番地1）
 方式：対面及びWeb開催（Zoomウェビナー）による中継
 会長：中川 貴仁（弘前医療福祉大学短期大学部 救急救命学科 准教授）



■ 大会長講演 中川 貴仁（弘前医療福祉大学短期大学部）
 「救急救命士の「臨床」「教育」「研究」を考える
 ～変革の時代に備えるために～」



■ 教育講演 演者 田中 秀治
 （国士舘大学大学院救急システム研究科）
 「21世紀に輝く救急救命士
 —その臨床・教育・研究の方向性—」

- パネルディスカッション①
 テーマ：「救急救命士に必要な教育とは」
 座長：喜熨斗 智也（国士舘大学大学院 救急システム研究科） 林 康弘（根室北部消防事務組合消防本部）
 ▷ 循環器救急疾患の病院前救護の標準化～PACC(Prehospital Acute Cardiac Care)の現状と課題～
 大谷 浩史（日本救急システム株式会社）
 ▷ 救急救命士によるショックの判断の精度（中間結果報告） 田之畑 李菜（宮崎大学大学院 医学獣医学総合研究科）
 ▷ 救急救命士のくも膜下出血によるカテコラミンが影響する病態理解の調査について 篠塚 雄希（済生会熊本病院 救急総合診療センター）
 ▷ プレホスピタルにおける負傷者対応能力向上と医療機器開発を視野に入れたWet Lab trainingの開発 三木 大輔（大阪EMS研究会）
 ▷ 医療機関内でのホットライン対応において救急救命士が感じる困難～アンケート結果からみえた現状と課題～ 飯島 甫（埼玉医科大学国際医療センター）

- ▷ 応急手当講習を受講した中高生のAED設置場所に関する認知度調査 若松 淳（弘前医療福祉大学短期大学部 救急救命学科）
 ▷ 救急隊の活動に対する患者満足度調査の開発 春名 純平（札幌医科大学医学部集中治療医学、札幌医科大学医学部 北海道病院前・航空・災害医学講座）



■ ランチョンセミナー 演者 鈴木 健介
 （日本救急救命学会 副理事長）
 「救急救命士が研究に取り組むためのfirst step」

- 一般演題①
 テーマ：「救急救命士の臨床」
 座長：森出 智晴（札幌市消防局） 後藤 奏（日本救急システム株式会社）
 ▷ 病院救急救命士の役割とその変遷～当院における病院救急救命士の業務内容とその変化を追う～ 杉崎 徹（社会医療法人駿甲会コミュニティーホスピタル甲賀病院）
 ▷ 当院における救急救命士による転院搬送の現状と課題 片山 久瑠（埼玉医科大学国際医療センター）
 ▷ ドクターカー活動における当院病院救急救命士の役割と今後の展望 守田 崇俊（八戸市立市民病院 救命救急センター）
 ▷ 救急車のドッキング搬送シミュレーションにおける多職種連携の取り組み 北原 誠也（社会医療法人財団慈泉会 相澤病院）
 ▷ 当院における病院救急車の運用状況とその将来～地域との共存、そして将来のビジョン～ 川島 直樹（コミュニティーホスピタル甲賀病院）
 ▷ 当院における救急救命士の役割と教育およびタスク・シフト/シェアに関する現状と課題 伊藤 康太郎（社会医療法人駿甲会コミュニティーホスピタル甲賀病院）
 ▷ 医療機関に勤務する救急救命士の役割と期待 織田 智治（安城更生病院）
 ▷ 当院救急救命士の業務内容と今後の展望 加納 正也（JCHO中京病院）

第9回日本救急救命学会学術集会を振り返る

▷院内救急救命士のタスクシフトの現状と課題の取り組みについて 川野 悠也 (JCHO中京病院)

▷「救急隊員のための救急現場のコミュニケーション」のセミナー展開について 吉井 友和 (日本救急救命学会)

■一般演題②

テーマ：「救急救命士の臨床」

座長：若松 淳 (弘前医療福祉大学短期大学部) 高嶋 弘継 (遠軽地区広域組合消防本部)

▷救急救命士法改正に伴い拡大された活躍の場における支援ツールの開発 山内 一 (愛知淑徳大学)

▷災害救急サービスの向上を目的とした兵庫県救急救命研究会の開設について 菊池 悠 (神戸市消防局)

▷全国救急救命NETの立ち上げとその取り組みについて 林 康弘 (NPO法人 道東救急医療研究会)

▷県内初「静岡県病院救急救命士部会(仮)」設置に向けた取り組みと今後の展望 望月 俊明 (社会医療法人駿甲会コミュニティホスピタル甲賀病院)

▷病院と消防機関が共同開催する症例検討会 齋藤 汐海 (京都橘大学 健康科学部 救急救命学科)

▷ハートセンターチームへの救命士介入 Door To Balloon Time短縮を目指し 救命士が関われる事 木曾原 匠 (医療法人新生会 高の原中央病院)

▷当院における救急救命士の教育について 大友 泰世 (大江戸江東クリニック)

▷救急救命士法改正後の当院の取り組み～1年後の現在までの活動～ 大塚 溪介 (社会医療法人財団慈恵会 相澤病院)

▷当院におけるメディカルコントロール体制の構築 佐々木 光風 (埼玉医科大学国際医療センター)

▷病院外心停止における早期通報と自己心拍再開の関連の検討 相馬 進之介 (弘前地区消防事務組合)

▷地域メディカルコントロール協議会単位の接触-特定行為平均時間の分析 木村 龍 (国土舘大学大学院救急システム研究科)

▷臨床研究を通じて他職種間の扉を開く一同じ土俵に立つことが学問確立の鍵となる 谷口 圭祐 (北海道総務部危機対策局危機対策課 防災航空室)

▷救急隊員のバーンアウトのリスク因子の検討 春名 純平 (札幌医科大学医学部集中治療医学、札幌医科大学医学部北海道病院前・航空・災害医学講座、札幌医科大学附属病院ICU)



■パネルディスカッション②

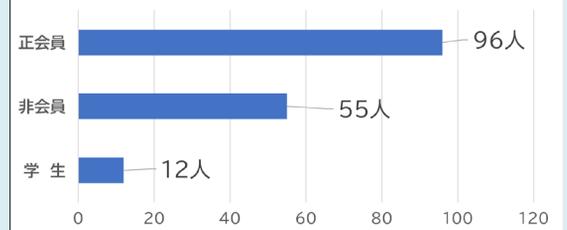
テーマ：「救急救命士に必要な研究とは」

座長：鈴木 健介 (日本体育大学保健医療学部) 小山内 健介 (弘前地区消防事務組合)

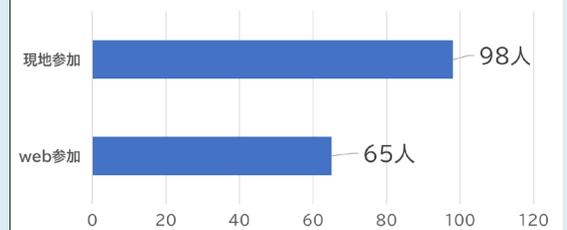
▷当院における転送されたくも膜下出血の現状と今後の課題 岸田 全人 (埼玉医科大学国際医療センター)

▷当センターに就業する救急救命士の効率的な教育のための救急救命処置以外の業務状況の把握 八重樫 秀和 (和泉市立総合医療センター)

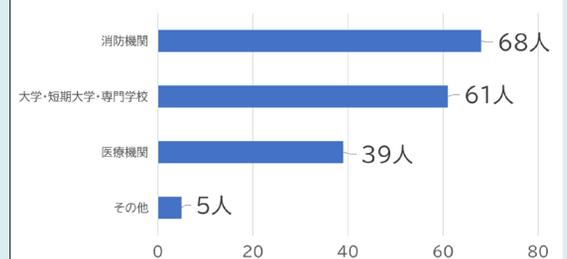
学会参加者概要



参加者の参加形態



参加者の所属



救急救命士ジャーナル 第11号のお知らせ

日本救急救命学会準機関誌「救急救命士ジャーナル」第11号のお知らせです。今号も皆様が興味をもっていただける特集や記事を精力的に掲載いたしました。当面、学会員には無料配布を予定しております。是非とも、この機会にご入会くださいましてジャーナルをその手に取って頂きたいと思っております。会員皆様からの論文も随時受け付けております。掲載される論文の質と学会誌としての信頼性を保つよう、査読者による査読システムを採用しております。これまで投稿先がなく、半ばあきらめていた救急救命士の方々も胸を張って投稿いただけます。詳しくは救急救命士ジャーナル投稿規定、またはオフィシャルサイトをご覧ください。

一般社団法人
日本救急救命学会準機関誌
Journal for Emergency Life-Saving Technician

救急救命士が作る
救急救命士のための



救急救命士 ジャーナル

年4回発行
編集発行人/佐藤 枢 発行所/株式会社へるす出版

次号3巻4号の目次 (予定)

- ◆救急救命士 最前線特集：医療機関の救急救命士
救急救命士法改正から2年経った今、
見えてきた課題と解決に向けた取り組み
- ◆救急救命士 in Hospital：八戸市立市民病院
- ◆進取果敢～全国各地、新たな取り組みを紹介！～：
PEMECコース開発とその変遷～緊急度判定と病態理解、
より質の高い病院前救護のために～
- ◆救急救命士図鑑：いろんな救急救命士をピックアップ：
イノベーションにあふれた医療機器を通じて救命に貢献
する～民間企業に勤める救急救命士としての使命～
- ◆巨人の肩の上に立つ：救急救命士が読み解く海外の最新
論文：難治性院外心停止への早期体外循環式心肺蘇生－
INCEPTION Trial
- ◆経験伝承：
救急救命士が学ぶべき分娩介助と産科救急について
- ◆外傷病院前救護の現状 from JPTEC
- ◆投稿論文：富士北麓医療圏の一地域における緊急・重症
傷病者に対するドクターヘリ・ドクターカー搬送効果の
検討

2023年12月20日発行 定価1,650円（本体1,500円+税）
へるす出版のサイトからご購入いただけます。

第9回日本救急救命学会学術集会を振り返って

第9回日本救急救命学会学術集会は、延べ163名の方にご参加いただき盛会のうちに終了致しました。本会では中川貴仁大会長のもと、「臨床」「教育」「研究」の現状についてクローズアップされた学術集会でありました。サブテーマとして「変革の時代に備えるために」と銘打たれ、大会長講演や教育講演においても救急救命士業界の新しい職域・未来の方向性について述べられ、2021年の救急救命士法改正を皮切りに救急救命士は変革期の入口に立っているのではないのでしょうか。

以前は救急救命士の臨床と言えば消防組織における病院前がほぼ全てを占めていたと言っても過言ではなかったかと思いますが、本学術集会では医療機関所属の方々の演題は登録演題の半分以上となりました。民間組織所属の方の演題も複数あり、聴講されていた皆さまもまさに変革期の訪れを感じたことと思います。

一方で、新しい領域ゆえに各機関における取り組みは様々であり、現状や課題などを多くの方に知っていただく機会であったかとも思います。参加者内訳も1/3が消防機関、1/3が医療機関・民間、1/3が教育組織と分かれています。その母数を鑑みると医療機関などのいわゆる新しいフィールドの方々による注目度が高かったのではないかと推察します。

このような変革期の中でまさに足元を固めるために「臨床・教育・研究」の現状についてフォーカスされた本会でありましたが、今後も各領域で活躍する救急救命士がそれぞれの強みを次回学術集会やジャーナルを通して持ち寄り、より相互理解が深まる機会となることを期待しています。

(S.Gotoh)

救急救命士ジャーナル投稿規定

1. 名称

名称は、救急救命士ジャーナルとし、本誌の英名は“Journal for Emergency Life-Saving Technician”とする。

2. 目的

本誌は日本救急救命学会の準機関誌であり、救急救命学の進歩と発展に寄与することを目的とする。

3. 投稿資格

- 1) 筆頭著者は本学会の会員に限る。ただし、編集委員会が寄稿を依頼した場合は、その限りではない。著者の人数は10名以内とする。
- 2) 投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」に必要事項を記入して添付すること。

4. 論文の受付

論文の受付には以下の要綱を満たす必要がある。

- 1) 著者の人数が10名以内である。
- 2) 8. 文章執筆要領に則した記述である。
- 3) 投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」及び、申告するCOIがある場合はCOI 申告書を提出している。

5. 論文の採否

投稿論文の採否は編集委員を含む3名で査読後、編集委員会の審査によって決定し、採用となった場合はその日をもって受理年月日とする。

6. 投稿内容

- 1) 本誌への掲載は救急救命士及び救急救命の領域の論文とする。
- 2) 論文は国内で未発表のものに限り、二重投稿は禁止する。ただし、海外で日本語以外の言語で発表した論文を日本語で記載しなおした場合は二重投稿とはみなさないが、著作権の保有者に使用許諾を得ていること、及びその場合の論文カテゴリは、「資料」とし最初の論文の掲載誌を明記する。

7. 投稿論文の種類

論文の種類は、総説、原著、調査・報告、症例・事例報告、資料・その他とする。

1) 総説

多面的に国内外の知見を集め、文献調査に基づき、総合的に学問的状况を分析・概説し、考察したもの。

2) 原著

論文の体裁(目的・対象と方法・結果・考察)が整っており、研究内容に新規性、独創性があり、方法の信頼性、妥当性が高く、その知見が論理的に示されており、学術的価値の高いもの。

3) 調査・報告

独自に行った調査等の結果をまとめ、報告並びに解説したもの。

4) 症例・事例報告

単独または複数の症例や事例をまとめ、考察を加えたもの。

5) 資料・その他

編集委員会が適当と認めたもの。

8. 文章執筆要領

- 1) 原稿はパソコンの文書作成ソフト (Microsoft® wordなど) にて作成し、A4判横書きで、40字×30行で行ページ設定する。
- 2) 現代仮名遣いに従い、医学用語を除き常用漢字を用いる。
- 3) 度量衡の単位はCGS単位を用いる。
- 4) 統計処理を行った時は、統計学的検定法を明記する。
- 5) しばしば繰り返される語は略語を用いてよいが、初出の時は完全な用語を用い、以下に略語を使用することを明記する。(例) 心肺停止 (cardiopulmonary arrest、以下CPAと略す)
- 6) 図、表、写真の引用は該当文章の末尾とする。
- 7) 原著の本文は、はじめに、目的、方法、結果、考察、結論の順位に記述する。
- 8) 症例・事例報告の本文は、はじめに、症例、考察、(結論)の順に記述する。
- 9) 論文の本文には頁数を付す。
- 10) ランニングタイトルは20字以内とする。

9. 和文要旨

400字以内の和文要旨をつける。

10. 索引用語

原則として日本語とし、総説、原著、調査・報告は5個以内とする。索引から目的の論文を確実に検索できるようなものを選択する。

11. 字数制限

原稿は本文、図表、写真、文献を含めて12,000字以内とする。図、表、写真は縦5cm×横7cmに縮小印刷が可能なもの1点を400字相当と換算する。

12. 図、表、写真

- 1) 図、表、写真には図1、表1、写真1などそれぞれに通し番号をつけ、日本語でタイトルを表記する。
- 2) 写真は解像度が高いものが望ましい。
- 3) 本文内に図、表、写真、の挿入箇所を示したうえで、用紙1枚に1点とし、「図、表、写真番号、」「タイトル」「説明文」を記載する。
- 4) 元データがある場合は提出する。
- 5) 図、表、写真等を引用・転載する場合は、著者自身が著作権者の了解を得た上で、出所を明記する。
- 6) 図表は原則としてモノクロとする。カラーでの掲載を希望する場合はカラー掲載料を著者が負担する。

救急救命士ジャーナル投稿規定

13. 文献

- 1) 文献は本文中に上肩付した引用番号順に配列し、20編程度とする。
- 2) 著者は筆頭著者から3名までは明記し、それ以上は「他」または「et al」とする。
- 3) 雑誌名略記は医学中央雑誌刊行会・医学中央雑誌収載誌目録略名表及びIndex Medicusに準ずる。
- 4) 文献記載例
<雑誌>

引用番号) 著者名: 題名, 雑誌名 発行西暦年;
巻: 頁-頁.

- 1) 片山祐介, 北村哲久, 清原康介, 他: 救急電話相談での緊急度判定で緊急度が低かった救急車出動事例の検討. 日臨救急医学会誌 2018; 21: 697-703.
- 2) Kinoshi T, Tanaka S, Sagisaka R, et al: Mobile Automated External Defibrillator Response System during Road Races. N Engl J Med 2018; 379: 488-489.

<単行本>

引用番号) 著者名: 分担項目題名, 編者名, 書名.
(巻). (版). 発行所, 発行地, 西暦年, p頁-頁.

- 1) 鶴飼卓: 阪神・淡路大震災. 鶴飼卓他編. 事例から学ぶ災害医療. 南江堂, 東京, 1995, pp35-48.

<WEB サイト>

引用番号) サイト機関: ページ名.(改行)URL(最終アクセス日: yy.mm.dd)

- 1) 総務省消防庁:平成30年度版救急救助の現況.
<https://www.fdma.go.jp/publication/rescue/post7.html>(アクセス日: 2020.1.26)

14. 倫理規定

- 1) 投稿論文のなかで、臨床に関わるものにおいては、傷病者や被験者ならびに特定の個人の人權を損なうことのないよう、必要に応じて倫理委員会による審査を得るなどして、十分配慮されたものでなければならない。
- 2) 個人が特定される年月日などの記載は臨床経過を知るうえでの必要最小限にとどめ、プライバシー保護に留意すること。
- 3) 実験動物に関わるものにおいては、動物愛護の面に十分配慮されたものでなければならず、必要に応じてその旨を記載する。

15. COI (利益相反) の開示

全著者の投稿内容に関連する企業や営利を目的とした団体からの資金援助等の利益相反関係を開示しなければならない。

16. 校正

掲載直前の最終校正は著者校正とするが、その際、大幅な追加、削除は認めない。

17. 別刷り

- 1) 発注は10部単位とし、製作費の実費を支払う。
- 2) 注文は著者校正時に行う。
- 3) 料金の支払いをもって発注完了とし、発注完了後1か月を目途に納品する。

18. 論文の著作権

本誌に掲載された著作物の著作権は、著者と日本救急救命学会の両者が保持するものとする。

19. 原稿の投稿方法

- 1) 論文投稿は電子媒体のみ受け付ける。
- 2) 著者は、図表入り完成原稿、図表ファイル(PDF形式以外)、誓約書(書式A)を本学会事務局に電子メールによって送付する。
- 3) COIの申告がある場合には、「投稿時COI(利益相反)申告書」(書式B)を合わせて送付する。
- 4) 著者は査読結果が通知された後、論文に修正が必要な場合は、1ヶ月以内に修正した論文、および査読コメントの回答文を返信する。
- 5) 著者は採択後の校正作業を1ヶ月以内に行う。



学会オフィシャルサイトでは以下のドキュメントをダウンロードいただけます

日本救急救命学会
オフィシャルサイト
<https://www.jsels.com>



【誓約書・COI申告様式】

誓約書、および申告するCOIがある場合はCOI申告書をご記入ください。

【投稿論文の査読に関するループブリック】

査読者は投稿論文に対してこのループブリックの評価項目を元にして査読を行います。

【論文投稿の流れ】

論文を投稿された際の採択までの流れを示した資料です。ご参考にしてください。

第10回日本救急救命学会学術集会 開催のお知らせ (2024年/令和6年)

会 長：竹田 豊 (企業警備保障株式会社・元出雲市消防本部)

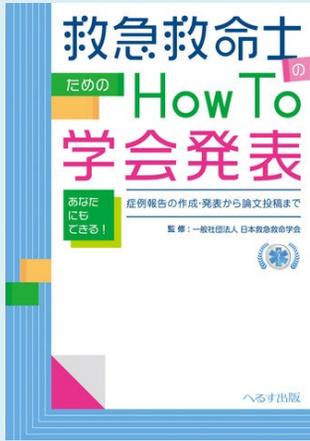
テーマ：『救急救命現場の「コミュニケーション」を考える』～伝承、そして、発展～

日 時：2024年10月19日 (土) 10時00分～18時00分 (予定)

会 場：島根大学医学部臨床講義棟 (島根県出雲市塩治町89-1)

方 式：ハイブリッド開催 (対面 及び Web)

【広告】学会監修 救急救命士のための How To 学会発表



あなたにもできる！
症例報告の作成・発表から論文投稿まで

学会で発表をしたい、でも何から手をつけてよいかわからない…。そんな救急救命士のために、テーマの見つけ方をはじめ、抄録や原稿の書き方、スライドの作成、学会での発表、さらに論文投稿までを実践できるよう

救急救命士の学会である日本救急救命学会の執筆陣が手ほどきします。

- ★コンパクトなA5判ながら写真や図表を多く取り入れ読みやすい！★
- ★実務的な部分について、経験者の目線から具体的に解説！★
- ★検定方法の解説などでは、そのまま代入して利用できるよう消防組織でなじみのあるデータサンプルで提示★
- ★スライド作りの解説では、Before Afterで例示したり、少しのアレンジですぐに転用できるデザイン集を掲載★

本学会はこれから研究や論文執筆に取り組みたいと考える救急救命士の方を、何らかの形でサポートしていく学会へと進化していきます。そのための第一弾です。

ぜひ、手に取っていただいて、症例報告や研究の第一歩を踏み出すためのきっかけにしてください。

これまで、独学で取り組んでこられた方にも、きっと新しい気づきがある一冊です。

—目次—

- Chapter 1 学会発表と論文投稿の勧め
 - I 学会発表 (症例を報告) することの意義
 - II 論文投稿の目的とは
- Chapter 2 症例報告から始める研究発表
 - I 現場の疑問を研究上の疑問へ変える
 - II 先行研究を探す
 - III 研究倫理を知る

Chapter 3 症例報告の基本構成

- I タイトル
- II COI
- III 背景
- IV 目的
- V 症 例
- VI 考 察
- VII 結 論

Chapter 4 必要最低限の統計学

- I 統計解析とは
- II データの形式
- III 記述統計
- IV 推測統計1 (仮説検定)
- V 推測統計2 (回帰分析)
- VI Excel で実践
- VII 仮説検定とP 値の誤解

Column バイアスって何？

Chapter 5 誰もが見やすいスライドの作り方

- I 「シンプルデザイン」とは
- II 骨子を作る
- III ベースデザインを決める
- IV 配色を決める
- V シンプルデザインを考える
- VI 各スライドを作る

Appendix

- ▼グラフの用途とデザイン
- ▼用途別スライドと資料の作り方

Chapter 6 学会発表に向けて

- I 学会に入会する
- II 口述発表

Appendix

- ▼ポスター発表
- ▼Web 会議システムでのセッション

Chapter 7 論文を投稿する

- I 学会発表と論文投稿の違い
- II 論文投稿先を決める
- III 査読とは
- IV 論文を書くポイント

定価 1,980円 (税込)

監修：一般社団法人日本救急救命学会
第1版・A5判・136ページ・並製
発行年月：2022年01月
ISBN 978-4-86719-032-6



【広告】学会監修 実践！救急隊員が語る 救急現場のコミュニケーション



救急現場ならではの、救急隊員ならではのコミュニケーション技法を現場経験豊富な執筆者らが解説。これまでの救急隊員教育にはなかった、救急隊員自らが考える救急現場活動の基礎となります。実際の救急現場を意識した内容となっており、救急活動において共感の得られるポイントを重視しています。

ケーススタディ、サイドストーリーではイラストを盛り込み、いくつかの「あるある」を提示しています。消防学校や救急救命士養成所などの初学者への入門書として、救急救命士や指導救命士らベテランの方たちには後進の指導教材として、ご活用いただけます。

－目次－

- 第1章 相手を感じる救急隊員の第一印象
救急隊員の身だしなみ
リスクになる救急隊員の身だしなみを考えてみよう
- 第2章 救急現場で遭遇する人たちとのコミュニケーション
－ケーススタディ－
Episode 0 吉井くん ほろにが隊長デビュー
Episode I 超軽症？ 不搬送時のフォロー
Episode II 興奮する家族とのコミュニケーション
Episode III 加齢性難聴の傷病者とのコミュニケーション
Episode IV 超緊急！ 強気な態度を使いこなせ
Episode V 搬送拒否を主張する見過ごせない傷病者
Episode final 吉井隊長の夜明け

第3章 アプローチの基本

救急隊はグループではなくチーム
入電情報に基づく隊員間の段取り
現場に必要なアプローチの肝

第4章 医療者とのコミュニケーション

病院連絡は難しくない
医療機関での引き継ぎ

第5章 大切なアフターコミュニケーション

応急手当を実施した人とのアフターコミュニケーション
引き継ぎ医師とのアフターコミュニケーション
傷病者や関係者とのアフターコミュニケーション
救急隊のアフターコミュニケーション
「有終の美」～未来の自分への糧～

Episode side story

- 1 日本語って難しい
- 2 微妙なお年頃
- 3 お母さん黙って…
- 4 女性を見る目はもともとない
- 5 加齢と語彙力

定価：1,320円（税込）

監修：一般社団法人日本救急救命学会

著：一柳保、竹田豊、西岡和男、吉井友和、脇田佳典

第1版・A5判・72ページ・並製

発行年月：2022年7月

ISBN 978-4-86719-045-6



編集後記

今号より日本救急救命学会ニューズレター小委員会の委員長を拝命いたしました、日本救急システム株式会社の後藤 奏と申します。大変光栄なお役目をいただきましたが、会員の皆さまに楽しんで読んでいただけるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いたします。▶誌面でも第9回日本救急救命学会の振り返りについて述べさせていただきましたが、2021年の救急救命士法改正に伴い救急救命士の活躍の場が大きく広がってきていると感じております。私自身も救急救命士養成校卒業後、大学院に進学しながら同時に三次医療機関で病院救命士として働いていましたが、当時は院内に救急救命士が居ること自体が非常に珍しく、多くの方に「どのようなことをしているのか?」「就業環境はどうなっているのか?」と問われることが多かったと記憶しています。その後、救急救命士を雇用する医療機関も増えていき、多くの方の尽力で救急救命士法が改正されました。今では医療機関で働く救急救命士も多くいらっしゃいますし、学生も就職における選択肢のひとつとして病院見学や説明会に参加しているというお話を聞き、まさに学術集会のテーマであった「変革期」の真っ只中なのだなと考えています。▶同じ救急救命士という資格ですが、消防機関、医療機関、民間企業などで活躍する救急救命士の役割は組織に準じて多種多様かと思えます。日本救急救命学会を通して、様々な職域で活躍する救急救命士が相互に理解・協力しながら「救急救命士」という業界が盛り上がり、願っています。

(S.Gotoh)